

共感共生労働としての学童保育

垣内 国光

明星大学

ケア労働は共感共生労働

学童保育の仕事はよく、「発達保障労働だ」といわれます。たしかにそうなのですが、「教育労働と同じである」といわれると少しちがうように思います。最近、看護や介護、福祉など人を相手とする労働をひきこめてケア労働として位置づけようとする議論があります。保育や学童保育もケア労働として考えてみてどうかというのが、ここでの問題提起です。

ケア労働にはどんな特徴があるで

しょうか。ケアとは、一人ひとりの人間を相手にする仕事です。その人の人生によりそい、気持ちを寄せていく労働です。喜び楽しみとともに、悲しみ苦しみを分かちあい、気持ちや感情を働かせる仕事です。定型化や標準化がむずかしい仕事です。

発達保障の仕事が、発達させていく、あるいは、なにかができるようにするという方向性をもつ労働だとすれば、ケア労働はどんな労働なのでしょう。ケア労働にはそうした方向性があるとはかぎりません。あ

響かせあうことそのものに価値を見いだそうとする労働です。こうした労働を、ここでは共感共生労働と呼ぶこととしましょう。

人の人生に伴走し、ともに生きていくケア労働は振幅の激しい労働です。喜び楽しみもあれば、悲しみ苦しみも伴います。心が通じあったときの喜びは大きく、それがあからこそつらいことが多くともがらばっていける労働であるともいえます。しかし現実には、気持ちが通じあえないとき、良かれと思っただけが逆の効果をもたらしたりするとき



特集「わたし 学童保育指導員です」

など、ケアをする人間は気持ちが悪く、ケアを受ける人間は気持ちがぼろぼろ折れ、負の方向に激しく揺さぶられることがあります。

「こんなことも通じあえないのではとてもプロとはいえない」「プロなのに怒りが収まらない」「自分はプロとしてダメなのではないか」と、こんなにグラグラ揺れる自分を情けなく思うこともあるのではないだろうか。

ゆらぐ指導員

保育や学童保育の世界では、よく「自分の要求が出せるようになる子に」ということが語られます。「言葉に出せなくても主張があるんだよね」「いいんだよ、自分の意見を出しても」という指導員の願いがあるからでしょう。ですが、待つことが必要だと分かっているにもかかわらず、じれったく思うこともあります。

さを同僚に受けとめてもらえた瞬間などです。分かりあえたときがあるからこそ、学童保育の仕事が続けられるともいえます。

指導し援助する専門職であるのに、冷静でいられず心が揺れ動くことは、実は誰にでもあることなのです。

ゆらぐことは関わりを深めること

「プロなのにこうも揺れ動く自分はダメな指導員だ」と思われる方も少なくないでしょう。でも、そうでしょうか。ゆらが無い指導員のほうが、ゆらぐ指導員より、よい保育をできると思えません。ゆらぐことそのものに意味があると思えるのです。

社会福祉研究者の尾崎新さんは、『ゆらぐ』ことのできるちから―ゆらぎと社会福祉実践』（一九九九年、誠信書房）という本でこんなことを



逆に、激しい要求を前面に出す子どももいます。要求がはっきりしているからいいかといえ、かならずしもそうとはいえません。その子の本当の要求が別のところにあたり、することも少なくありません。激しい要求でしかやり場のない怒りや不安を表現できないでいるのかもしれない。そうと分かっているけれども、指導員は時にうんざりし、心のなかで「どうして君はそうなってしまったんだ」とストレスをため込んでしまうこともあるでしょう。

「自分の要求が出せるようになる子」
「援助者が」ゆらぐことは、相手と向き合い関わりを深めることにつながり、ゆらぐことは、しなやかな援助の視点を導くことになるのだと。

尾崎さんに学んでいえば、第一は、ゆらぐということとは、子どもたちを理解し関わりを深めているプロセスだと理解できるのではないのでしょうか。

ゆらぐのは、子どもへの思いがあるからであり、子どもへの願いがあるからであって、ゆらぐことは子どものより深い理解を深めているプロセスであり、もっと深い関わりをもつためのプロセスなのです。ですから、怒りや自己嫌悪に陥ったとき、そう思う自分を否定したり指導員失格と思わないでほしいのです。

大切なことは、そうした自分から逃げ出さないことです。どうして自

に「ということひとつとっても、指導員は毎日、心を痛めたり怒りたい気持ちを抑えたり、感情をうまくコントロールできないで苦しみながら、子どもに向き合っているというのが現実ではないでしょうか。

同じことは、指導員と保護者との関係でもいえます。時に思いがけない理不尽な要求をする保護者もいることでしょう。そうした要求であっても、それなりの理由があって受けて、心の中がキレてしまい、そのキレた自分にまた嫌悪することもめずらしいことはありません。

この逆に、たったひとつの出来事が落ち込んだ自分をふるいたたせ、「もう少しがんばっていいかな」と思えることもあるはず。心を開いてくれなかった子どもと心が通いあった瞬間、あるいは悲しさ苦し

分がそう感ずるのか、考え続けることです。そうした自分をまず受けとめ、解決しないまま抱え続けていいのではないのでしょうか。

このように、ゆらぐ自分をひとまず肯定も否定もしないで受けとめることができれば、その場かぎりの、子どもを傷つける言葉や行動はしだいに回避できるようになるはず。なぜ、そう感じたのか自己内対話をし、信頼できる仲間の指導員との対話を通じてゆっくり発酵させていけばいいのです。否定的な感情も含めて、その自分を否定しないでほしいのです。

第二は、ゆらぐことは、新しい子どもの見方、自分の発見につながるということ。ゆらぐ自分を受けとめることができれば、相手に対する新しい見方ができるようなものになるのです。なぜ、

特集「わたし 学童保育指導員です」

最後に、ケア労働をめぐる情勢についてひとことふれておきましょう。

確かに、指導員の専門性を語るべき、あそびの引き出しがいっぱいあって自由自在にその状況に応じた保育ができるということも大切ではありません。しかし、どんなに技術的に優れていたとしても、相手理解が十分でなく共感関係も成立していない保育よりも、技術的には素朴であっても子どもによりそってともに生きようとする保育、つまり、内発的欲求に支えられた保育のほうが、はるかに評価できるはずです。そこに専門性の核があるのですから。

学童保育の専門性を認めてこそ



介護労働が典型的なのですが、今の日本のケア労働は契約によるケア労働にしないで変質させられようとしています。食事介助、清拭といった行為としてのケアが点数化され、その行為の組み合わせによって報酬が支払われるという仕組みです。導入が進められつつある新保育システムもその延長線上にあります。このシステムののもとでは、保育園の報酬は保育量に対する出来高払い制によって支払われます。行為としてのケアが求められ、保育の定型化・標準化がめざされています。学童保育も同じような扱いになっていく危険性ははらんでいるように思われます。子どもによりそい、共感関係を築き、ともに生きるという見えないケアは、報酬対象とはならないのです。「余計なことまでしたがる人々」は要らないということです。保育や学童保育は、保育者・指導員の実践を媒介してなりたつ実践です。保育者・指導員の裁量に負うところが大きい専門労働です。その実践の質は、実践の定型化・標準化や施設間競争、指導員間競争によって向上させることはできません。保育者・指導員の専門性を評価し、その内発性と裁量権を認めることによってしか向上できないのです。指導員を大切にしないで子どもたちを大切に育むことはできないのです。

そう感じたのか、なぜ許せなかったのかを考え続けることで、ある日、自らの隠された気持ちに気づき、自分があまりに一面的にしか子どもを理解していなかったことが分かります。そして、自らの指導のあり方に幅が生まれ、実践がより豊かなものになっていくのです。

このように、日々の実践はまっすぐな一本道ではなく、行きつ戻りつゆらぎなら、指導員は実践を重ねているのではないのでしょうか。立派な実践ではなくともいいのです。子どもたちと心を響かせあって誠実にともに生きようとしているならば、そのこと自体に実践的な価値があるのですから。

内発的欲求にさせられた実践

さて、ゆらぎながら子ども理解が深まり、新しい子どもの見方ができ

るようになると、指導員のうちにはどのような変化が生まれるのでしょうか。

指導員は子どもが分かれば分かるほど、「この子にはこうもしてあげたい、ああもしてあげたい」という内発的実践欲求が生まれるはずですが、マイナスの方向にゆらぐこともあれば、このようにプラス方向にベクトルが働くこともあります。これが共感共生労働の特徴なのです。

それは、分かれば分かるほど、しあげたくて仕方がない突き上げるような衝動といえば分かりやすいでしょうか。決められたこと、指示されたことを実践するのではなく、内発的に次々と実践欲求が生まれるのです。残業になってしまいうようなことも、そこまですなくても思われるような家庭との連絡も、あそびを次々と発展させたいことも、内

発的なものです。時には施設長と対立しても、したくなるような実践欲求もあることでしょう。そうした保育者や指導員を私は、「余計なことまでしたがる人々」と呼んでいます。でも、だからこそいいんですね。いやいやながらしている人の保育などだれも受けたくないでしょう。契約して定められた保育計画だけを実践すればいいのであれば、そんな学童保育を好きになる子どもはいないでしょう。

対人ケアの仕事である学童保育という労働は、定型化も標準化もできない活動です(だからといって、保育計画が不要というわけではありませんが)。子ども理解に基づく内発的なものであってこそ、価値があるのです。一人ひとりことなる子どもによりそい、理解し、関わりを深め、その子どもたちとともに生き抜く労